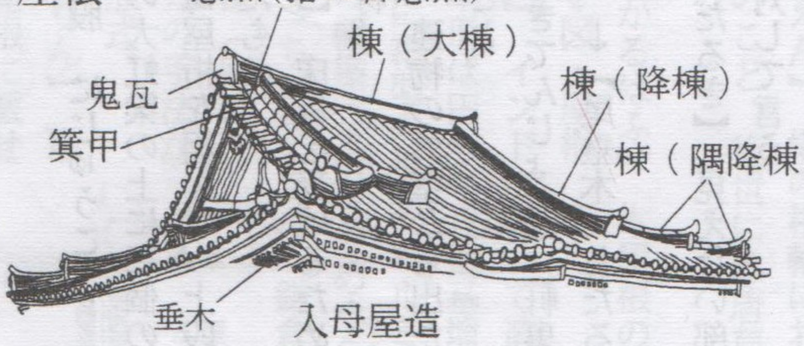
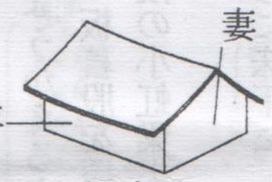
用語解説・図版編

※ここに掲載した写真は全て大岡資料 1-1-3-0 であり、以下に記載した数字は整理番号である。

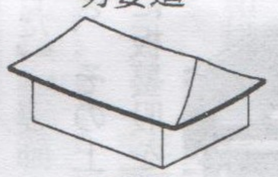
屋根



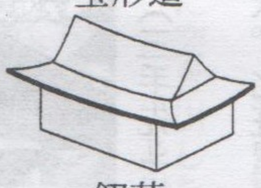


切妻造

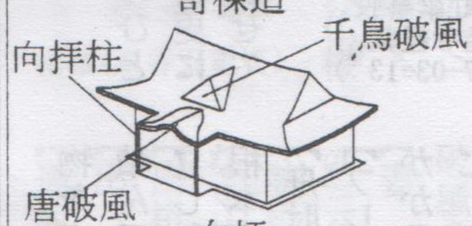
宝形造



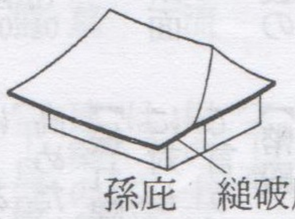
寄棟造



錣葺

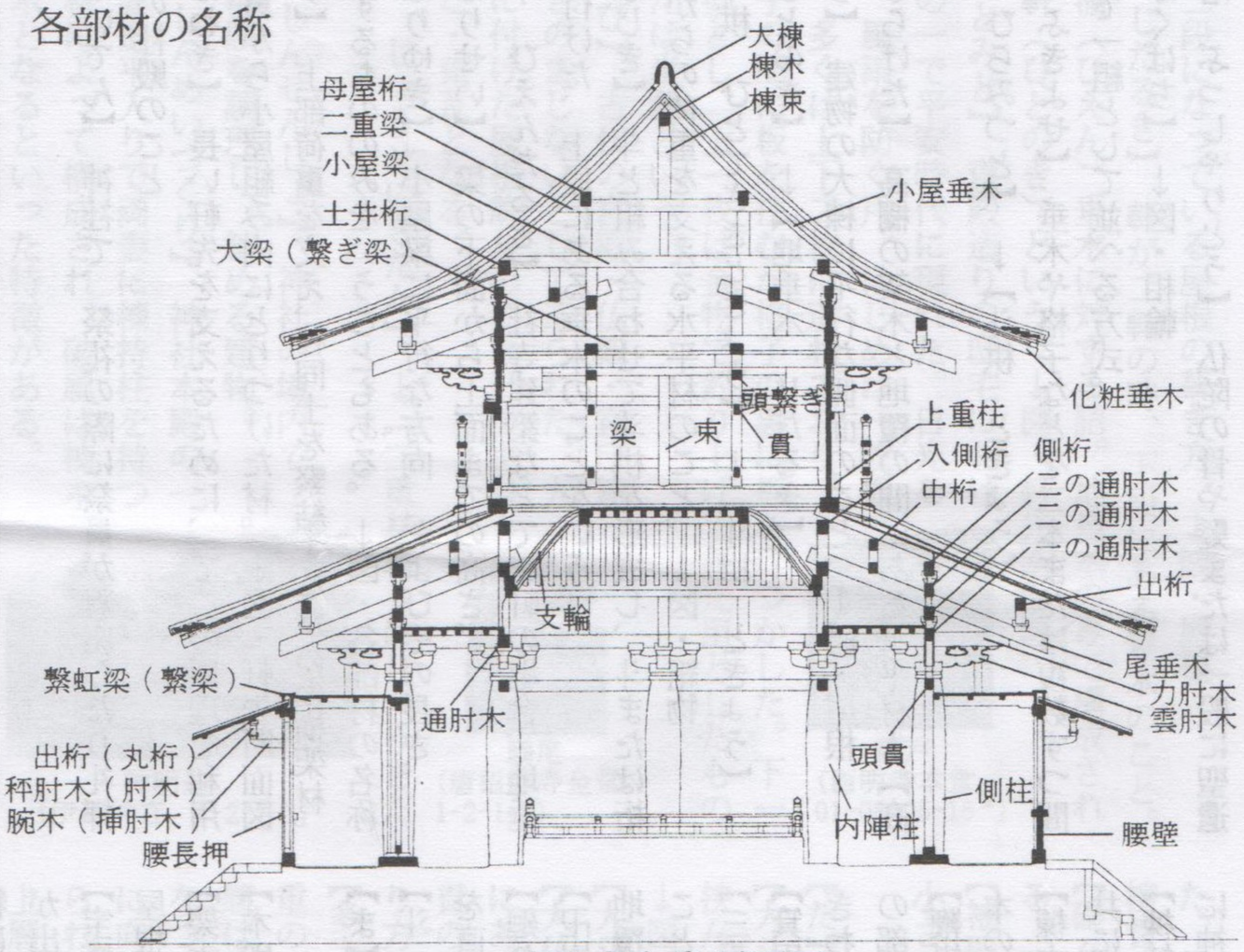


向拝



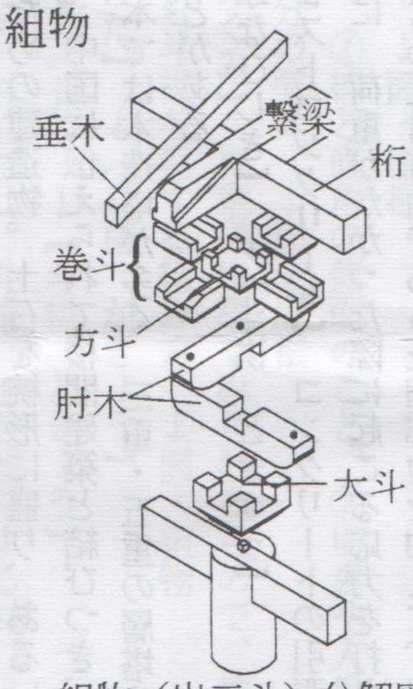
孫庇　縋破風

各部材の名称

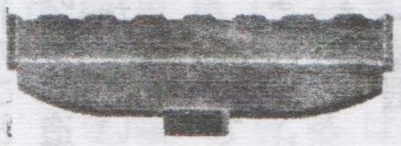


法隆寺金堂断面図

組物

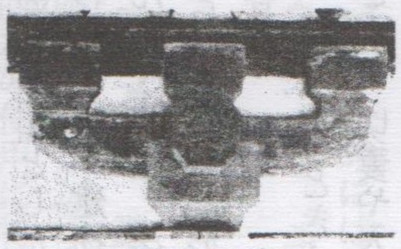


組物（出三斗）分解図



①舟肘木

②大斗肘木



③平三斗

④出三ツ斗

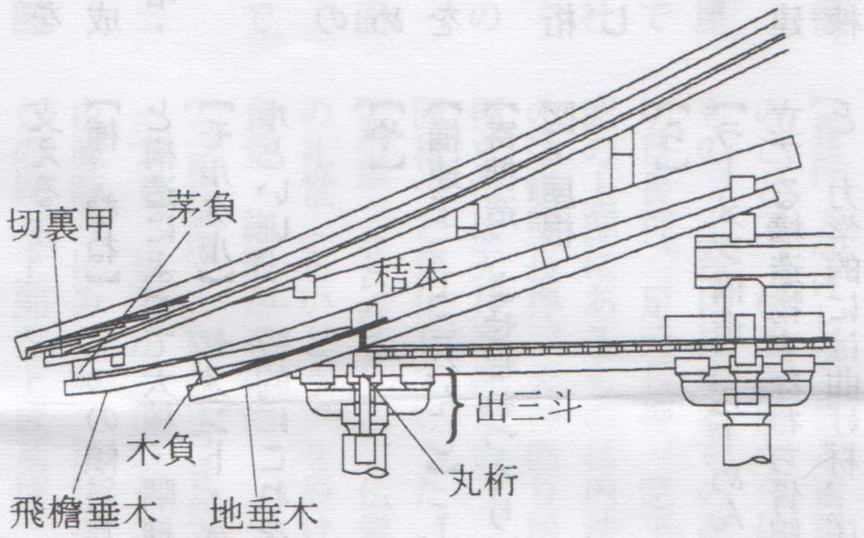
⑤出組

⑥三手先斗栱

⑦雲形斗栱

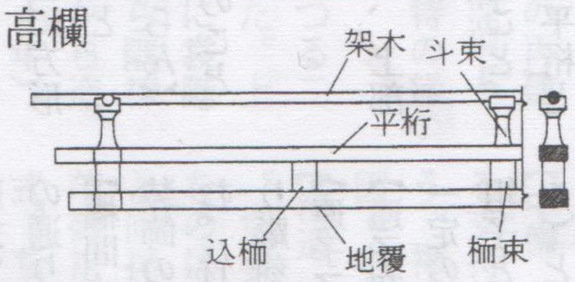
①愛宕念仏寺本堂、01-06-04-01
②鶴林寺太子堂、01-06-03-04
③平等院鳳凰堂、01-06-03-05
④中尊寺金色堂、01-06-03-01
⑤白水阿弥陀堂、01-06-03-06
⑥唐招提寺金堂、01-06-02-01
⑦法隆寺金堂、01-06-01-09

軒先断面図

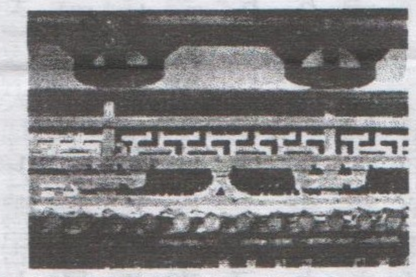


東院礼堂、鎌倉時代

高欄



薬師寺東塔二重高欄



法隆寺高欄 (01-07-01-01)

木鼻

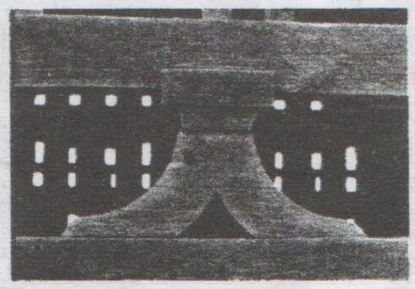
大仏様（浄土寺浄土堂、01-06-09-02)

大仏様（不退寺南門、01-06-09-04)

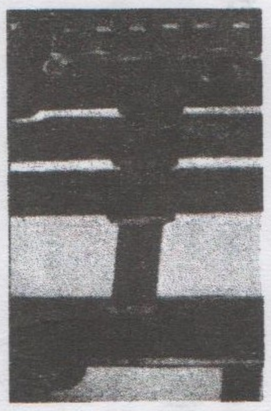
禅宗様（明王院本堂、01-06-10-05)

中備

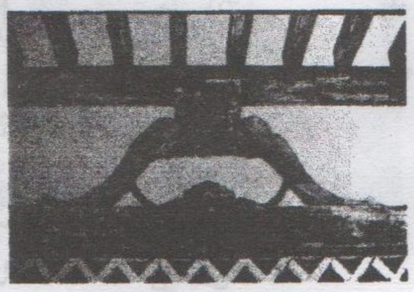
①法隆寺中門、01-07-01-05
②興福寺東金堂、01-08-05-01
③宇治上神社本殿、01-07-07-02
④海住山寺文殊堂、01-07-05-10
⑤円覚寺舎利殿、01-08-06-10



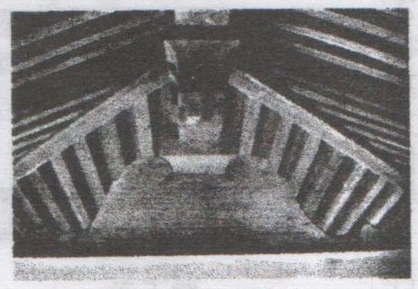
①人字型割束



②間斗束



③蟇股（本蟇股）



④蟇股（板蟇股）

⑤詰組斗栱

用語解説・文章編

ここに掲載した写真はすべて大岡資料である。括弧内の数字は基本的に資料番号だが、※のついたものは分類番号1-1-3-0の整理番号である。

【あ】

【相の間　あいのま】 権現造や八幡造りの社殿の、本殿と拝殿の間にある室のこと。板敷きや石の間のことで、北野天満宮や久能山東照宮にみられる。大猷院霊廟のような拝殿と同高の場合のみを指す場合もある。↓【権現造　ごんげんづくり】

【板軒　いたのき】 軒裏で垂木を用いずに、厚板を屋根勾配の方向に張っている軒。

【豕叉首　いのこさす】 妻飾の一種で、二本の斜材に中央に叉首束を立てる。

【入側柱　いりかわばしら】 建物の外周から一列内側に入った柱の総称。

【入母屋造　いりもやづくり】 上部を切妻造とし、その四方に庇をつけた形式の屋根。法隆寺金堂の屋根の類。↓図・屋根

【腕木　うでぎ】 柱または梁などに一端をとりつけ、横に突き出し、横木や桁などを支承する部材。↓図・各部材の名称

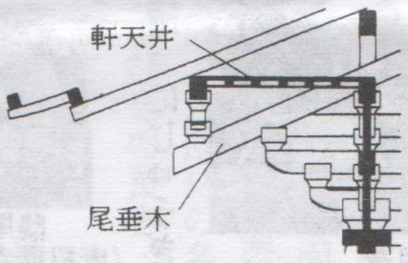
【大梁　おおばり】 柱に直接結合された、構造上最も重要な梁。小梁からの荷重をうける。

【大棟　おおむね】 屋根の頂上における水平な棟の総称。隅棟・降棟に対していう。棟両端には鬼瓦、獅子口などをつけ、端部上端に鴟尾、鯱、鳥衾を載せることもある。↓図・屋根

【尾垂木　おだるき】 社寺建築で小屋組から斗栱を通し、斜め下に突出している材。

【鬼瓦　おにがわら】 大棟または降り棟の端に用いられる飾り瓦の総称。鬼の面がなくてもいう。

豕叉首
（平清水八幡宮本殿、01-08-06-13※）



三手先斗栱断面
（薬師寺東塔）

鬼瓦
（新薬師寺、1-2-1-1）

【か】

【蟇股　かえるまた】 主として和様に用いられた、梁の上にあって上部の荷重を受ける蛙の股の様な形をした装飾的部材。厚い板でできた板蟇股と、内部をくりぬいた本蟇股がある。↓図・中備

【丸桁　がぎょう】 社寺建築で、垂木を受ける一番外側の桁のこと。名前の由来はその断面が円形であったためだが、角でもいう。法隆寺の建築では「出桁」という。↓図・各部材の名称

【下成基壇　かせいきだん】 ↓【二重基壇　にじゅうきだん】

【片蓋柱　かたふたばしら】 壁の側面につけた装飾的な柱。

【片持ち梁　かたもちばり】 一端を固定、他端を自由にした梁。

【勝男木　かつおぎ】 神社本殿の棟木上の円形断面の短材。

【茅負　かやおい】 軒が一軒の場合は地垂木の端部、二軒の場合は飛檐垂木の端部にのる横木。極めて古いものは上端を波形に刳って直接平瓦を載せたが、雨漏りのため、瓦との間に水切りのための裏甲と瓦なじみのための瓦桟を置くようになった。↓図・軒先断面図

【唐破風　からはふ】 破風の一つで、中央が起り、左右両端が沿った曲線状の破風。↓図・屋根

【側柱　がわばしら】 建物の外周の柱。↓図・各部材の名称

【木負　きおい】 軒が二軒の場合に、地垂木の端部に載る横材で飛檐垂木を支えている。↓図・軒先断面図

【木鼻　きばな】 社寺建築において頭貫などの隅が柱で突出することがあり、この突き出た部分をいう。木鼻には繰形、彫刻などがあり、その形状によって拳鼻、象鼻、獏鼻などという。鎌倉時代の大仏様、禅宗様（唐様）の時に現れた。↓図・木鼻

【擬宝珠　ぎぼし】 高欄や階、橋などの親柱の柱頭に付けられた、宝珠の飾りのこと。ねぎの花の形に似ている。

【切妻造　きりづまづくり】 大棟を境として両方に流れをもつ山形の屋根↓図・屋根

【組物　くみもの】 ↓【斗栱　ときょう】

【雲形斗栱　くもがたときょう】 飛鳥様式の斗栱で法隆寺金堂や五重塔にみられる。雲肘木の上に雲形の繰方をもつ斗（雲斗）をのせ出桁をうける。↓図・各部材の名称、組物

【雲形肘木　くもがたひじき】 飛鳥時代の肘木で、雲形の繰方をもつ肘木のこと。雲肘木ともいう。

【懸魚　げぎょ】 建物の妻で、棟木や桁の端にある装飾材のこと。梅鉢懸魚、蕪懸魚、猪目懸魚などがある。↓図・屋根

【化粧垂木　けしょうだるき】 ①軒下や室内から見える所にある見えがかりとなる垂木の総称。構造材であると共に装飾材でもある。②飛鳥・奈良時代の仏教建築では、直接に瓦土を受けていたが、平安以降では野垂木の出現によってこれが葺き土を受けるようになった。

【外陣　げじん】 神社の本殿や寺院の本堂において御神体または御本尊を安置する内陣の前にある、人々が礼拝する所。ただし、神社の本殿においての外陣は礼拝空間ではない。内陣・外陣の区画は平安時代後期から鎌倉時代にかけて成立した。

【桁　けた】 側柱の上に渡して、垂木を受ける水平材。

【桁行　けたゆき】 小屋梁に直角な方向。およびその長さ。

【間斗束　けんとづか】 和洋建築において、台輪または頭貫の上、斗栱と斗栱の間にある斗のついた束のこと。↓図・中備

【向拝　こうはい】 社殿や仏堂の前の階に張り出した庇のこと。参拝者の礼拝のために使われる。二本または四本の向拝柱で支えている。階隠の一。↓図・屋根

【向拝柱　こうはいばしら】 ↓【向拝　こうはい】

【高欄　こうらん】 宮殿や社寺の縁廻り、橋の端部にある欄干のこと。単なる装飾の場合もあるし、人の転落を防ぐ機能を持つ場合もある。通常は架木・平桁・地覆の三水平材と、斗束・込栓・栓束の垂直材からなる。↓図・高欄

【虹梁　こうりょう】 社寺建築に用いられるやや反りを持たせて作った、化粧梁のこと。↓図・各部材の名称

【小壁　こかべ】 内法長押と天井廻り縁の間の幅の狭い壁。

【腰壁　こしかべ】 壁の腰のあたりの部分のことを壁一般と区別していう。↓図・各部材の名称

【小屋組み　こやぐみ】 屋根の面を支えるための骨組み。

【権現造　ごんげんづくり】 神社本殿形式の一つで、拝殿と本殿を石の間で連結した形式。屋根は連続している。石の間は後世に板張り、畳敷きとなる。拝殿は入母屋造で正面中央に千鳥破風、前面の向拝に唐破風をつける。拝殿は入母屋造りで、本殿も入母屋造のものが多いが、流造のものもある。平安時代の北野天満宮で成立したと考えられており、桃山時代の霊廟で広く使われるようになった。北野天満宮、大崎八幡宮などがこの例。

権現造
（大崎八幡宮、1-2-1-4）

【さ】

【挿肘木　さしひじき】 大仏様建築最大の特徴で、組物の斗の上には乗らず、柱の側面に差し込んだ肘木。先端は肘木型または木鼻で、肘木上に肘木を更に重ねて迫り出す。↓図・木鼻

【実肘木　さねひじき】 斗の上にあって、直接桁を受ける肘木。

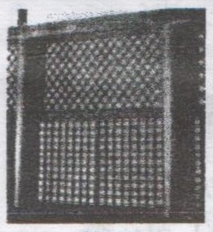
【繁垂木　しげだるき】 密接に並べた軒の垂木またはその垂木割のこと。

【鍬葺屋根　しころぶきやね】 屋根面が途中で一段下がり、全

体として二段になっている屋根の葺き方。↓図・屋根

【地垂木　じだるき】 軒が二軒の時、下段にある垂木のこと。上段の飛檐（ひえん）垂木に対する語。地垂木のみで構成される軒は一軒（ひとのき）という。↓図・軒先断面図

【蔀戸　しとみど】 寝殿造りの邸宅における屏障具の一で平安時代に現れた。日光をさえぎり、風雨を防ぐ戸。はじめは一枚板だったが、多くは上下二枚に別れており、一対の格子の間に板を挟むか格子の裏に板を打つかした。下一枚を欠き壁とし、上一枚は金物で釣り上げて採光用としたものを釣蔀または半蔀という。


蔀戸
（西明寺本堂、01-08-05-15※）

【鴟尾　しび】 古代の宮殿・仏殿・官庁建築に火防ぎのまじないとして造られた、大棟の両端に付けた屋根飾りのこと。後世はしゃちほこ・鬼瓦となる。

鴟尾
（唐招提寺金堂、1-2-1-1）

【上成基壇　じょうせいきだん】 ↓【二重基壇　にじゅうきだん】

【神饌所　しんせんじょ】 神社の境内で、神に奉る神饌を調理し、納める建物。

【神明造　しんめいづくり】 神社本殿の一形式。切妻造平入りで両妻に棟持柱を持つ。直線部材によって構成され、破風は棟木を貫き千木となるといった特徴がある。

神明造
（伊勢神宮、1-2-1-1）

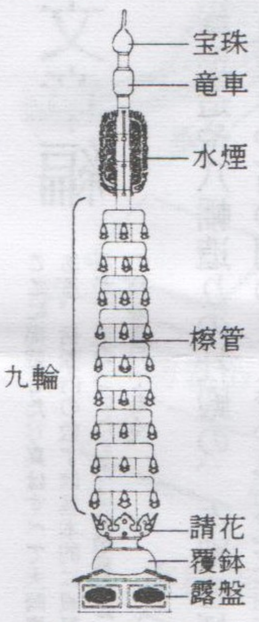
【水煙　すいえん】 塔の相輪において、九輪の上にある火炎状の装飾金具のこと。後世には唐草または渦紋とする事が多い。↓図・相輪

【縋破風　すがるはふ】 本屋根の軒先から更に突き出した片流れの破風。↓図・屋根

【ストゥーパ】 インドにおいて遺骨を埋蔵した塚形式の火葬墓のこと。基本形は円形の石造基壇の上に半球形の石造覆鉢を盛り、その頂上に箱型の平頭（ハルミカ）と相輪とを立てたもので、周囲を石造の欄楯（玉垣）でめぐらし、塔門（トラーナ）を開く。

【折衷様　せっちゅうよう】 鎌倉時代以降、和様を基に大仏様または禅宗様（唐様）あるいは両方の手法が用いられた形式。

【相輪　そうりん】 塔の最上層の屋根に載せた、鉄製または青銅の装飾物。下から順に露盤・覆鉢・請花・擦管・擦管に積み重ねられた九輪・水煙・竜車・宝珠から成る。



相輪（東寺五重塔）

【礎石　そせき】 主として社寺や殿舎などの建物の基礎となる、壁又は柱下の石のこと。

【袖壁　そでかべ】 建物や柱から外に突き出して設けられた、小さな壁。

【た】

【大斗　だいと】 一般的には柱のすぐ上もしくは台輪や皿斗を挟んで置かれる斗のこと。斗組の中で最大の斗のことをいう。↓図・組物

【大斗肘木　だいとひじき】 ↓【斗栱　ときょう】

【大仏様　だいぶつよう】 鎌倉時代初め、重源が東大寺の再建にあたって創始した、宋の様式を取り入れた建築様式。構造上、貫の多様と挿肘木の使用に特徴があり、木鼻・蟇股に独特の繰り方をつける。↓図・木鼻

【多宝塔　たほうとう】 釈迦・多宝二仏や大日如来をまつる二重の塔婆。日本創出で、密教の盛行と共に多く造立された。上層は円形で亀腹をつけ、宝形屋根をのせる。下層は周囲に裳階をつけ、平面は方形となる。上には相輪を立て、請花から隅棟に向かって鎖をつなぎ、これに風鐸を吊るす。平安時代から造られたが、現存するものは石山寺のものが最古（１１９４年）。上層の円柱を下層まで伸ばしたものを「大塔」という。

【垂木　たるき】 木造建築で屋根の裏板（屋根板）または屋根下地を支えるために棟から桁に架け渡す材のこと。

【千木　ちぎ】 古墳時代の豪族の邸宅や各時代の神社建築の屋根の上にある、破風の先端がのびて交差して二本の木。後世では、交差した材を棟に置き、破風と千木は無関係となり、神社建築の象徴となった。

【千鳥破風　ちどりはふ】 屋根の傾斜にとりつけた、三角形の破風のこと。↓図・屋根

【妻　つま】 ①棟と直角の側面のこと。②切妻や入母屋の妻面の三角形部分の壁体。↓図・屋根

【詰組　つめぐみ】 禅宗様建築でみられるもので、柱上だけでなく柱間にも斗栱を配する組み方。↓図・組物

【出桁　でげた】 ↓【丸桁　がぎょう】

【出三斗　でみつと】 ↓【斗栱　ときょう】

【通肘木　とおしひじき】 斗栱同士を連結する材。↓図・各部材の名称

【斗栱　ときょう】 柱の上にあって、軒を支持する部分。斗、肘木、桁から構成される。形式は、丸桁が柱通りにあるものは舟肘木、大斗肘木、平三斗、出三斗がある。丸桁が柱通りから外に出るものは、軒桁の出方から順に、一手先斗栱（出組）、二手先斗栱、三手先斗栱などがある。この他に飛鳥時代に用いられたものとして雲形斗栱がある。斗組ともいう。↓図・組物

【トラス】 材と材とを結合して組み立てる構造物で、三角形を基本単位とし節点が全て回転自由なピン接合のもの。

【な】

【内陣　ないじん】 ↓【外陣　げじん】

【中備　なかぞなえ】 柱上の組物の間にある、各種の桁を受ける支持材の総称。間斗束や蟇股、撥束、蓑束、大瓶束などがそう。禅宗様と大仏様では斗栱を入れ、これを詰組みと呼ぶ。↓図・中備

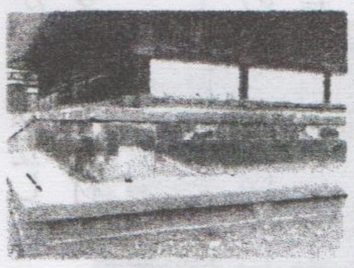
【流造　ながれづくり】 神社本殿の一形式。切妻造平入りで屋根に反りをつけ、前面をのばして向拝としたもの。その下に階段と向拝を設ける。平安前期よりおこり、賀茂御祖神社・賀茂別雷神社に代表される形式。ちなみに、正面が三間のものを三間社流造、一間のものを一間社流造という。

流造
（賀茂御祖神社、1-2-1-4）

【長押　なげし】 日本建築において、柱と柱とを繋いだ水平材のことで、柱を両面からはさみ付け大釘で打ち留めて固定したもの。土台に接するものを地長押、縁板に接するものは縁長押、切目長押、足元長押、窓下位置にあるものは腰長押、出入口や窓の上部にあるものは内法長押、内法長押と天井の間にあるものは蟻壁長押、天井回り縁の下端に接しているものは回り縁長押または天井長押という。元来は構造材であったが、次第に意匠材へと変化していった。↓図・各部材の名称

【双堂　ならびどう】 仏堂形式の一つ。礼拝の空間である別棟の礼堂（らいどう）を設けたもの。法隆寺食堂・細殿がこの例。

【二重基壇　にじゅうきだん】 基壇形式の一つで、基壇が二重のものをいう。飛鳥・白鳳時代にみられ、法隆寺金堂や五重塔はこの例。上部を上成基壇、下部を下成基壇


二重基壇
（法隆寺金堂、1-2-1-1）

という。

【二重虹梁蟇股　にじゅうこうりょうかえるまた】 妻飾のひとつで、妻側の大虹梁の上に二個の板蟇股を置き、その上に更に二重虹梁と母屋桁を組んで、上段の小虹梁上に板蟇股を載せて棟木を受けたもの。

【根太　ねだ】 床板を受けるために床下に渡した横架材。

【軒　のき】 建物の外壁から出た、屋根の下端部分のこと。

【軒天井　のきてんじょう】 軒裏に張った天井のこと。→【尾垂木　おだるき】の下図（三手先斗栱断面図）参照

二重虹梁蟇股
（法隆寺経蔵、01-07-03-13※）

【野垂木　のだるき】 見えない部分にある垂木。化粧屋根裏の化粧垂木に対して言う。

【は】

【拝殿　はいでん】 神社で、祭礼の際に祭員が着座したり礼拝するための社殿のこと。

【桔木　はねぎ】 長い軒先を支えるために、てこの原理を利用して、軒裏から小屋組み内にとりつけた材。→図・軒先断面図

【梁　はり】 上部荷重を支え、柱同士を緊結するための横架材。棟と直交するもののみをいうこともある。→図・各部材の名称

【梁行　はりゆき】 小屋梁に平行な方向、およびその長さ。

【梁成　はりせい】 梁の下面から上面までの高さ。

【飛檐垂木　ひえんだるき】 社寺建築などで二軒の場合、地垂木の先に付けた、上段にある垂木のことをいう。

【肘木　ひじき】 斗と組み合わせて斗栱を形成し、斗または桁をうけ上からの荷重を支える水平材のこと。→図・組物

【一手先斗栱　ひとてさきときょう】 →【斗栱　ときょう】

【一軒　ひとのき】 →【地垂木　じだるき】

【平　ひら】 建物の大棟に平行な側面のこと。→図・屋根

【平桁　ひらげた】 高欄の架木と地覆の間にある水平材→【高欄】

【平三斗　ひらみつと】 →【斗栱　ときょう】

【吹寄せ　ふきよせ】 垂木や格子などを二本または複数ずつ間隔を詰めて一組として並べる方式。

【覆鉢　ふくばち】 →図・相輪

【仏舎利塔　ぶっしゃりとう】 仏陀の骨や髪または一般に聖遺物をまつるための建造物。土石を椀形に盛り、あるいは煉瓦を積んで作る。中国に伝えられて楼閣建築と結びつき、層塔が成立した。日本では木造塔が多く、三重・五重の層塔や多宝塔・根本大塔などがある。

【舟肘木　ふなひじき】 →【斗栱　ときょう】

【プレストレストコンクリート】 コンクリートの引張り応力のかかる部分に、荷重がかかった際に起こる応力を打ち消すために、あらかじめ反対方向である圧縮応力を加えて、引張強度を高めたコンクリートのこと。

【振れ隅　ふれすみ】 木造建物の隅の仕口形式の一。隅棟が桁に対し四十五度をなさない場合のこと。四十五度の真隅に対して言う。

【幣殿　へいでん】 神社で参拝者が幣帛を奉奠する為の社殿。

【宝形造　ほうぎょうづくり】 平面が正方形または八角形の建物にのみ見られるもので、屋根中央から四方または八方に隅棟が出る屋根。→図・屋根

【宝塔　ほうとう】 仏塔の形式の一つで、円形平面で上に方形屋根をのせた単層塔と多宝塔の裳階をとった二重塔のこと。

【架木　ほこぎ】 高欄の最上部の水平材→【高欄　こうらん】

【本殿　ほんでん】 神社において、神霊を奉安する社殿のこと。

【ま】

【斗　ます】 斗栱を構成する一部材。柱などの上に設け、上部を直方体、下部を曲面とした木。→図・組物

【廻り縁　まわりえん】 建物の2方以上にまわした縁のこと。

【卍崩し　まんじくずし】 法隆寺金堂や五重塔の高欄の平桁と地覆の間にみられる高欄の形式で、卍を崩した形のパターンのこと。→図・高欄

【三手先斗栱　みてさきときょう】 →【斗栱　ときょう】

【箕甲　みのこう】 切妻や入母屋造の反り屋根で、屋根の破風ぎわ（登り軒付けの上端から平流れの部分との間）になす曲面の部分。

【鞭掛　むちかけ】 神明造の社殿で破風板から外に突き出た四本の小部材。根元は方形だが、先端では円形となっている。

【棟木　むなぎ】 小屋の頂部の桁行方向に用いる横木。母屋と共に垂木を受け桁行方向につなぐ。→図・各部材の名称

【棟持柱　むなもちばしら】 棟木を直接支える柱の総称で、特に神明造の社殿において、妻側の壁の外で突出した棟木を直接支える柱。

【棟　むね】 二つの傾斜した屋根面の交わる部分のこと。位置と構造によって大棟・隅棟・箱棟などがある。

【モルタル】 セメント・水・砂を混ぜたものをセメントモルタルといい、一般的にこれを指す。

【や】

【横連子　よこれんじ】 →【連子窓　れんじまど】

【寄棟造　よせむねづくり】 大棟から四隅に流れのある屋根→図・屋根

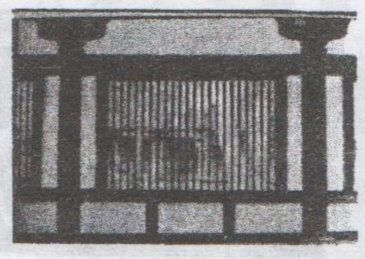
【ら】

【ラーメン構造　らーめんこうぞう】 材と材とを結合して組み立てる構造物すなわち骨組で各接点を剛に接合にしたもののこと。力学的には曲げ材、圧縮材、引張材り材が結合されている形式である。「剛節架構」ともいう。門型ラーメンは、その名の通り、門の形をしたラーメン構造のこと。

【欄間　らんま】 天井と鴨居との間に設けられた、採光・通風・装飾のための開口部。外周建具の上部の明かりとりのものも含む。竹の節、格子、透かし彫りまたは丸彫り彫刻の板を取りつけたりする。

【連子子　れんじこ】 →【連子窓　れんじまど】

【連子窓　れんじまど】 縦または横のみに一定の間隔を置き、細い角材を取りつけて組子とした窓。この組子を連子子（れんじこ）という。通常は組子を竪に並べる竪連子窓であるが、まれに横連子窓もある。


連子窓
（法隆寺回廊、01-08-05-16※）

【わ】

【和様　わよう】 鎌倉時代に中国から導入された大仏様・禅宗様（唐様）に対して、従来の様式すなわち中国建築を原型として日本化し、奈良時代に完成した様式のことを指す。

【蕨手　わらびて】 曲線の先端の巻き上がった形が、蕨のような形をしたものの総称。神輿の屋根の上や高欄などにみられる。

【割束　わりづか】 下方が人字型に開いた束のこと。法隆寺金堂の高欄に使われている。中備の一種で、現存するものでは一番古い形式。「人字型の割束」ともいう。→図・中備